

「毛」と「ん」

宇都宮 睦男

青谿書屋本土佐日記は、周知のように、紀貫之自筆本を藤原定家の子為家が書写し、更に江戸時代の初期、それを転写したものである。しかし、これが極めて原本に忠実に書写されたものであることは、夙に定評のある所である。

今、この青谿書屋本の仮名の用字法を調べてみると、[mo]の音節を表わす仮名に何らかの使い分けが存するように見受けられる。そこで、これについて調べてみたことを、少し報告させて頂くことにしたい。

まず、青谿書屋本に使われている[m]の仮名には四種ある。即ち、「毛」160例、「ん」149例、「ん」例、「む」例である。このうち、用例の少い後二者を除いて、残りの前者の「毛」と「ん」について、これらが語頭に用いられているか、語中尾に用いられているか、又は、助詞として用いられているかを調べてみた。その結果によると、「毛」の用法中、(1)語頭に用いられている場合

が32例、(2)語中尾に用いられている場合が29例、(3)助詞に用いられている場合が100例である。一方、「ん」の用法中、(1)語頭に用いられた場合が35例、(2)語中尾に用いられた場合が68例、(3)助詞に用いられた場合が45例である。

このうち、まず相対的に用例の多い助詞に用いられた場合から検討をしていく。まず「毛」が助詞に用いられた場合の100例中、(1)毛(係助詞)に用いられた場合が86例、(2)と毛(確定逆接助詞)が9例、(3)毛がな(終助詞)が4例、(4)と毛(仮定逆接助詞)が1例である。一方、「ん」が助詞に用いられた場合の45例中、(1)ん(係助詞)が41例、(2)どん(確定逆接助詞)が2例、(3)んがな(終助詞)が1例、(4)かん(終助詞)が1例である。このうち、用例の多い(1)(2)の係助詞の「毛」と確定逆接助詞の「ドモ」の場合について調べてみることにする。

さて、この「ドモ」又は「モ」のついた文節が後の文

節に係っていく場合に、その間に他の文節が介在しているか否かを調べ、夫々にどちらの仮名が用いられているかを更に調べると次のようになる。まず「毛」の場合である。

①とかくいひてさぎのかみ^Aいまの毛^B、ろとんに^Cおうて
(22頁)

②たつしらなみのこゑ^Aより毛^Bおくれてなかんわれや^Cま
せらん(34頁)

③かならずし毛^Aいひつかふんのにん^Cあらずなり(19頁)

④ことく^Aの毛^Bありけれど(22頁)

⑤さかしき毛^Aなかるべし。(22頁)

⑥こしかひ毛^Aなくわかれぬるかま(26頁)

右のうち、①から③までの用例は、間に他の文節が介在していて、間接的に後の文節に係っていく場合である。つまり、①の「とかく云々」の用例では、「いま毛」という文節が間に「こ(も)ろとんに」という文節を介在させ、それを隔てて、間接的に「おうて」という文節に係っている。そして、その場合に「毛」の仮名が使われている。

次に、②の「たつしらなみの云々」の用例では、「こ

ゑより毛」という文節が、間に「おくれてなかんわれや」という文節を介在させて、それを隔てて間接的に「ませらん」という文節に係っている。そして、その場合に「毛」の仮名が使われている。

又、③の「かならずし毛」の用例では、この文節が、間に「いひつかふものにも」という文節を介在させて、それを隔てて間接的に「あらずなり」という文節に係っている。そして、その場合に「毛」の仮名が使われている。

次に、④から⑥までの用例は、間に他の文節が介在せず、直接的に後の文節に係っていく場合である。つまり、④の「ことく」の毛」という文節は、間に他の文節を介在させることなく、直接的に「ありけれど」という文節に係っている。そして、その場合に「毛」の仮名が使われている。

次に、⑤の「さかしき毛」という文節は、間に他の文節を介在させることなく、直接的に「なかるべし」という文節に係っている。そして、その場合に「毛」の仮名が使われている。

又、⑥の「こしかひ毛」という文節は、間に他の文節

を介在させることなく、直接的に「なく」という文節に係っている。そして、その場合に「モ」の仮名が使われている。

以上は、係助詞「モ」の場合であるが、次に確定連接の助詞「ドモ」の用例をあげる。

- ① うみは^Aあるれども^Bこころは^Cすこしなきぬ。(43頁)
 ② よのなかに^Aおんひやれども^Bこころを^Cこふるおもひにまざるおもひなきかな(46)

- ③ か^Aれども^Bくるしければ^Cなにごともおんほへず(53)

- ④ おほかれども^Aか^Bかず。(42)

右の用例のうち、①から③までは、この「ドモ」のついた文節が、間に他の文節を介在させて、それを隔てて下の文節に係っていくものであり、最後の④は「ドモ」のついた文節が間に他の文節を介在させることなく、直接的に次の文節に係っていく用例である。要領は助詞「モ」の場合と同じであるから、一つ一つの説明は省略する。

さて、このような調査をした結果を一覧表にまとめ、その用例数と百分率を記すと次の表一のようになる。

(表一)「モ」が助詞として用いられている場合の用例数と百分率

合 計	項 目			モ	ん	計
	(1) A 自語 + ドモ	B 他文節 + C Aの係る文節	(2) A 自語 + ドモ			
87	46	46	41	8	7	87
9	8	8	1	1	0	9
96	54	54	42	8	7	96
(100%)	(56.3%)	(56.3%)	(43.7%)	(8.3%)	(7.3%)	(100%)
45	7	7	38	2	9	45
2	2	2	0	0	0	2
47	9	9	38	2	9	47
(100%)	(19.1%)	(19.1%)	(80.9%)	(4.3%)	(19.1%)	(100%)
143	63	63	80	10	10	143

この表の項目(1)というのは、「モ」又は「ドモ」のついた文節が間に他の文節を介在させて、間接的に係っていく場合であって、この表の上の方の仮名「モ」の場合は、合計の欄を見ると、全用例96例中、54例(即ち、56・3%)であるのに対して、表の下の方の仮名「ん」の場合は、全用例45例中、僅かに9例(即ち、19・1%)に過ぎない。又、この表の項目(2)というのは、「モ」又は「ドモ」のついた文節が間に他の文節を介在させることなく、直接的に係っていく場合であって、この表の上の方の仮名「モ」の場合は、合計の欄で見ると、96例中42例(即ち、43・7%)であるのに対して、表の下の方の仮名「ん」(mo)の場合は、実に45例中38例(即ち、

80・9%)の多きに達している。つまり、この表から明らかになることは、表の上の方の仮名「毛」は、どちらかといえば、項目(1)の方に多く用いられ、一方、表の下の方の仮名「ん(も)」では項目(2)の場合の用例が圧倒的に多いということである。

次に、表二は初めにも述べた「毛」「ん」の二種の仮名が、自立語の語頭に用いられているか、語中尾に用いられているかを調べたものである。

(表二)「毛」「ん」が自立語の語頭・語中尾に用いられている場合

合 計	項 目	
	(1) 語頭に用いられている場合	(2) 語中尾に用いられている場合
60 (100.0)	28 (46.7)	32 (53.3)
103 (100.0)	68 (66.0)	35 (34.0)
163 (100.0)	96 (58.9)	67 (41.1)

(注) ()内は百分率

この表によると、(1)の自立語の語頭に用いられた場合については、表の上の方の仮名「毛」の場合は32例(即ち、53・3%)であるのに対して、表の下の方の仮名「

ん」の場合は35例(即ち、34・0%)であるに過ぎない。又、(2)の自立語の語中尾に用いられた場合については、表の上の方の仮名「毛」の場合は28例(即ち、46・7%)であるのに対して、表の下の方の仮名「ん」の場合は68例(即ち、66・0%)と多くなっている。つまり、表の上の方の仮名「毛」は、どちらかといえば、(1)の語頭に多く用いられ、一方、表の下の方の仮名「ん」は、明らかに(2)の語中尾に多く用いられている。

このように、表の上の方の仮名「毛」は、自立語の場合には、語頭に多く用いられ、助詞の場合には、この「毛」のついた文節が、間に他の文節を介在させて、後の文節に間接的に係っていく場合に多く用いられる傾向がある。他方、表の下の方の仮名「ん」は、自立語の場合には語中尾に多く用いられ、助詞の場合には、この「ん」のついた文節が間に他の文節を介在させることなく、後の文節に直接的に係って行く場合に圧倒的に多く用いられる傾向がある。

このような「毛」の二つの仮名の傾向は如何なる意味を有しているのであろうか。要するに、表一・二の上の方の仮名「毛」は、ある文節の頭部と末部とに置かれて、

その文節の境目を目立たせる役目をしてゐるが、一方、表の下の仮名「ん」は、ある文節又は連文節の中間部に位置しているということになります。この用字法上の違いは、前者の「モ」が、^{〔カ〕}という音節表示の機能の他に、文節の「区切れ」を示す、所謂「句読点」のような役目をもあわせて果しているように思われる。このような機能を、他の文節との「目立たせ」を表わす機能という意味で「示差的機能」と呼ぶことも可能である。一方、後者の「ん」は、専ら文節又は連文節の中間部に位置してゐて、自らは目立つことなく、全体のまとまりを果す上に寄与しているという意味で、「統合的機能」と呼ぶことも可能である。

そして、このような両者の用字法上の違いのよつて未
る所は、字形・字体などの視覚的な違いに起因している
面が多かろうと思う。即ち、示差的機能を果す「モ」は、
字画数も多く、目立ちやすい字形であるから、これを用
いることによつて、文節の境界部を明示し、一方、統合
的機能を果す「ん」の方は、字画数も少なく、目立ちに
くい仮名字体であるし、しかも、続け書きの比較的容易
な仮名であるから、文節の中間部に位置することが多い

のであろうと思われる。

以上、音節「モ」を表わす仮名二つの、用字法上の違
いと、その意味する所を考へて来た。終りに、このよう
な調査に如何なる価値が存するのについて、少し申し
添えない。いわゆる「仮名遣」という言葉には、広狭二
つの意味がある。広義には、文字通り仮名の遣い方とい
う意味であるが、狭義には、「歴史的仮名遣」とか「現
代仮名遣」とかいう場合の、所謂「規範」としての仮名
遣いである。従つて、広義の仮名遣から狭義の仮名遣を
差し引いた残りの仮名遣いの問題——これに本調査は該
当するものとみられる。このような領域の研究は、狭義
の「仮名遣」と区別して、「用字法」とか「文字遣」と
か呼ぶことも可能である。いわゆる狭義の「仮名遣」は、
音韻変化との対応において問題になる仮名遣であるが、
この「用字法」又は「文字遣」の研究は、音韻とは普通
直接には関係を持たず、純粋に文字そのものの用法の問
題とみられる。所謂「文字論」といわれるものの研究領
域の一つともみられる。

古代には、現代と異つて、或る一つの音節を表わす仮
名に数種あるのが普通であつた。従つて、当時には現代

とは異った文字使用上の問題が漢字だけではなく、平仮名や片仮名の上にも存したのではないかという仮説の上に立っての一つの調査である。

なお、本稿で使用した青鉛書屋本のテキストは、萩谷朴編『影印本 土佐日記』(新興社版)である。

(付)本稿は「ヨモヒトヨムシ」と題して、印刷広島大学国語教育学会(一九七七・八)で発表したものに
よっている。

(うつのみや・むつお、本学教授)